

ゲート

— 外伝^{プラス}
特地迷宮攻略編 —

自衛隊 彼の地にて、斯く戦えり

柳内たくみ

目次

特地迷宮攻略編

7

栗林志乃 特地にて、斯く戦えり編

235

帝国の薔薇騎士団 グレイ・コ・アルド編

271

特地迷宮攻略編

いたみ ようじ
伊丹耀司 …………… 陸上自衛隊二等陸尉。元・第三偵察隊隊長。オタク趣味の持ち主で、同人誌やネット小説を愛読する。

テュカ・ルナ・マルソー …………… 金毛碧眼のエルフ上位種族の娘。ファザコン。しかも両刀。

レイ・ラ・レレーナ …………… ヒト種の賢者、魔導師。最年少での導師号取得を目指している。

ロウリィ・マーキュリー …………… 巫神。神エムロイの使徒。黒ゴス神官服を纏いハルバートを振り回す。

ヤオ・ロウ・デュッシ …………… ダークエルフ。テュカを追い込んだ贖罪として伊丹に身を捧げるも相手にされていない。



栗林志乃 特地にて、斯く戦えり編

くりばやし の
栗林志乃 …………… 女性自衛官。特地派遣にあたり、深部情報偵察隊第三部隊(第三偵察隊)の所属となる。小柄ながら豊富なバストを装備。特殊作戦群に憧れる猛者。

くろかわ まり
黒川茉莉 …………… 女性自衛官。特地派遣にあたり、深部情報偵察隊第三部隊(第三偵察隊)の所属となる。衛生担当。趣味は注射。見た目によらず毒舌。

帝国の薔薇騎士団編 グレイ・コ・アルド編

ピニャ・コ・ラーダ …………… 帝国皇女。14歳。帝国の安寧を心から願う騎士団を発足。国を守るだけの本格的な兵団を志す。お遊び気分の団員達とかなりの温度差がある。

グレイ・コ・アルド …………… 帝国軍元軍団首席百人隊長。その手腕と経験を買われ、ピニャ騎士団の指導官に抜擢される。

ポーゼス・コ・パレスティ …………… ピニャ騎士団第一隊長。13歳。金髪縦巻ロール。名誉あるパレスティ侯爵家の娘。ピニャと反目しあっている。

ヴィフイータ・エ・カティ …………… ピニャ騎士団親衛隊長。13歳。男勝りの美少女。大貴族の娘だが複雑な出自の影響により良くも悪くもあけすけな性格に育つ。ピニャからの信頼は絶大。

ノーマ・コ・イグルー …………… ピニャ騎士団第四隊長。16歳。たたき上げの帝国軍人である父の血を引き、将来有望な剣の才を持つ青年。

特地迷宮攻略編

「うわっ、うじゃうじゃいやがった！」

暗くて狭い地下迷宮の廊下を曲がった瞬間、鉢合わせするように出現した『ヒト型物体』。

伊丹耀司は、びつくりしたことを声高に主張しつつ、その胸部に六四式小銃の銃口を押しつけ切り替え軸を素速く『タ』に合わせた。

六四式小銃の安全装置は「実戦を全く想定してないぞ、これ！」と叫びたくなるほどに、解除に手間の掛かる構造をしている。回転式の切り替え軸を、『ア』——安全、『タ』——単発、『レ』——連発のそれぞれに、ダイアルのように合わせなければならぬのだ。

しかも各箇所小さな窪みに突起を差し込む必要があるがあり、指先一つで切り替えるというわけにはいかない。つまんで、軽く持ち上げて、回す。そのため、安全装置をかけていると咄嗟に発砲出来ないという恐ろしさなのだ。

こういう場面では思わざるを得ない。設計者はどうしてそのようにしたのだろうか、と。

問い詰めたら設計者X氏はきつとこう返してくるに違いない。「安全第一を志向した」と。「簡単

に安全装置が解除できては暴発しやすくなる。そのような形での不幸な事故を防ぐため、良かれと思つてその構造にした」と。だが結論はユリウス・カエサル曰く、「どんな悪しき結末に陥つた行いも、良かれと思つて始められた」の典型例をなぞつた。

武器に求められる基本的な性能とは、味方にとって安全で敵には危険という矛盾した性質だ。この矛盾を極限にまで高めてこそ名品と呼ばれる。安全を徹底したあまり咄嗟に撃てないような銃は、味方にとって安全でも、敵にとつても安全ということになってしまう。その意味で六四式小銃は紛れもなく欠陥品なのだ。

とはいえそれでも、陸上自衛隊はこれを正式採用し、隊員達の多くもこの銃を愛している。

「あばたまえくぼ」という言葉がある通り、使用していれば欠陥も愛おしくなる——からではない。六四式小銃が普通科隊員の主力武器だった頃の陸上自衛隊は、ソ連軍の大規模な侵攻があった場合、米軍が助けに来るまで持ちこたえることが求められていた。そのため六四式小銃はソ連軍の侵攻に対する遅滞行動——陣地を構え、敵を出来るだけ離れた距離で伏撃して戦闘展開させ、その間に後退してまた伏撃するという行為を繰り返す——、すなわち、守りの戦術思想が込められた設計になっていたのだ。故に遭遇戦の起こりやすい都市部や森林内といった場面で咄嗟に撃てないとか、部品の数が多過ぎて分解結合に手間取るといった欠点は、些細なこととして問題視されなかつたのである。

この問題が真剣に重要視されるようになったのは、ソ連崩壊以降、北朝鮮や中国の脅威が強くな

り、ゲリラ・コマンドが国内に潜入して騒擾そうじょうを起こし始め、我と彼が不意に遭遇してコンマ数秒の遅れが生死を分かつという戦闘状況が予想されるようになってからである。

そしてその頃には、八九式小銃が登場しており装備の更新も始まっていた。

実際八九式小銃では、安全装置の課題に対する若干の改善が見られた。しかしそれは、あくまでも六四小銃との比較の問題であり、充分に満足できる域にはやはり達していない。どうしても安全第一の思想が優先されてしまうのだろう。結局この問題は解決されることなく、対処は次世代銃へと先送りされたのだ。

問題は全ての銃が、ある日を境に全て更新されるわけではないこと。未だに六四式小銃を使用している部隊では、この扱いの難しい銃で不期遭遇戦に備えなければならぬ。

そこで現場隊員達は、回転軸を『タ』の少し手前、ぎりぎりまで切り替え軸を回しておき（この状態でも引き金は引けないのだから、実に優秀な安全装置である）、咄嗟の際に指先一つで簡単に発砲可能にするという裏技を編み出していた。これによつて六四式小銃でも素速い発砲が、とりあえずのところ可能となったのだ。

切り替え軸を人差し指で軽く撫でて『タ』——単発に合わせた伊丹は、まず、引き金を二回連続して引き絞った。

肩にずしつと感じる反動が二回。そして床を転がる薬莢やつかいの音が二個分。

その『ヒト型物体』は、頭部と胸部に大穴を穿うがたれて崩れるようにその場へと倒れた。

「次！」

戦果を確認した伊丹は次の目標、廊下の奥へと視線を向けた。

すると、狭い廊下を埋め尽くすようにして近づいてくる『ヒト型物体』。

その数と距離とを素速く目測。伊丹の手は流れるように動いて、切り替え軸を『タ』から『レ』へと合わせていた。

三発の短連射を連続して六回。

たちまち六体の『ヒト型物体』が廊下に崩れた。貫通した弾丸がその後ろにいる個体にも命中したが急所からはずれていることもあって効果はない。

二十発入りの弾倉に込められた弾丸も尽き、槓桿こうかんが開きつばなしとなる。「弾切れだ、弾倉を交換しろ」というサインだ。

「くそっ、これだから六四は！」

八九式小銃は三十発の弾丸を装填そうてんできる。しかも軽い。にもかかわらず特地派遣部隊では六四式小銃が主力装備とされた。

旧式の武器ならば壊しても捨てても惜しくないからとか、在庫一斉処分などと陰口を叩かれていたが、実際はきちんとした理由があった。銀座事件の際に八九式小銃を携えた一連隊の隊員達が帝国兵との白兵戦になった際、銃剣が敵兵のチェーンメイルに引っかかり引き抜くことが出来ず、思わぬ不覚をとつたり、オークヤトルといった大型、肉厚の怪異に対し、八九式の五・五六ミリ

弾では威力不足で斃すのに苦勞したという経験があったのだ。

六四式の銃剣ならば余計なギミックがついてないから、刺突して刀身に肉が絡みついたとしてもスムーズに引き抜くことが出来る。

さらに六四式の七・六二ミリ弾ならば厚さ十三ミリの鋼板すら貫通する力があり、オークのような体格の大きな肉厚の怪異すらも撃ち倒すことが可能だ。ましてや伊丹の目の前に現れた『ヒト型物体』は危険ではあっても華奢で動作は遅い。急所に命中すれば、一発で機能停止させることが出来るのだ。

唯一の問題は、この『ヒト型物体』が群れを成すこと。

狭い回廊を埋め尽くして進んでくる『ヒト型物体』は、仲間が倒れても気にすることなく、そのまま踏み越えて数に任せてズリズリと突き進んでくる。そうなると弾倉を交換している暇はない。二十発という弾数の少なさがなおさら恨めしく思えてくる。

伊丹は弾だまに手を伸ばした。

だが、『ヒト型物体』が思ったよりも近づいていることを確認すると、マガジン・プルタブに指を掛けるのをやめ、素速くホルスターから九ミリ拳銃を抜く。

銃口を『ヒト型物体』の頭部に指向させる。発砲の反動が伊丹の肘から肩、肩甲骨を通じて背骨へと伝わった。

石の床に散らばる真鍮製の葉莖は、すすけた鉛色となっていた。

引き金を引き絞りながら、伊丹はこの作業をいつまで続けなければならないのだろうかという思いで相棒に問いかけた。

「おい、ヤオ！ こいつらこの迷宮にどれだけいるんだ!？」

すると隣で矢を番えていたヤオが答えた。

「クレティの町で病で死んだ者、全員分だ！ 百を下るということはあるまいよ！ 最低でも二百はいるはずだ!！」

「二百!? 二百もか!？」

「あるいはもつとだ!！」

ヤオは黒い矢羽根を軽く舐めると、立て続けに二本放った。

矢を眼球、あるいは喉に受け、あるいは伊丹の拳銃弾を胸部正中線に食らった『ヒト型物体』は次々と斃れていった。

だが、斃しても斃しても尽きることなく、『ヒト型物体』は次々と湧いてくる。

そう『物体』だ。

それらはすでに人間ではない。

如何にかつて人間であった面影を残していようと、姿形が美女や美少女であろうとも、彼女達は医学的には死亡しているのだ。

その人型の肉塊は、日本人一般には『ゾンビ』として知られる物体に成り下がったものである。

足をずりずりと引きずりながら、群れを成して押し寄せてくるのも、不意に訪れた伊丹達を歓迎しようとか、あるいは不法侵入者を撃退しようという高度な思惟機能の発露ではない。ゾンビという動く屍肉に備わった、捕食・吸血衝動に駆られてのものだ。

それらが伊丹達に向かつて進んでくるのも、「うぼわ〜」と手を伸ばして掴みかかってくるのも、解剖して取り出したカエルの大腿に電気を通したら筋肉が縮んだという現象と同じで、生命機能の残滓なのだ。

だからそれだけに始末に負えない。

いくら胸に大穴を空けても腹部を打ち抜いても、機能停止してくれない。とつくの昔に死んでいく彼女達——もとい、その『ヒト型物体』を動かすのは、何かのウィルスか、はたまた呪いの類いによって機能している中枢神経系であって、これに手足が繋がっている限り、死体はその命令に従って動いてしまう。

これらを完全に機能停止させるには脳髄や脊髄を破壊してしまうか、あるいは手足を体幹から切り離してしまう以外にないのだ。

新たに三体のゾンビを斃し、拳銃弾を撃ち尽くした伊丹は、えい面倒くさい、こうなったらとう少しばかりやけっぱちな気持ちで、M26破片手榴弾を取り出した。

「ヤオ、手榴弾を使うぞ！ 合図と同時に廊下の角を戻って隠れる！ いいな！」

「わ、分かった！」

彼女達の歩みは遅い。伊丹とヤオの脚力ならば、後ろを向いて全力で走るだけで引き離すことは充分に可能だ。我が身が助かることだけを考えるなら、こんな暗い地下迷宮に踏み込んで、美女・美少女の姿をしている屍肉をわざわざ挽肉状に変えてしまう必要はないのだ。

しかし、しかしである。

今の伊丹達にはそれをしなければならぬ事情があった。何としてもこの薄暗い廊下を抜け、地下室の深奥部に踏み入り、その奥に自生しているかも知れないロクデ梨を、熱病に効果があるという薬草を、手に入れなければならない。

そのためなら、たとえ倉田から「オタクとしては断じて許しがたい」と責め立てられても、この美少女ゾンビ達を断固として躊躇わず破壊しまくる覚悟なのだ。

「いくぞ」

手榴弾から安全ピンを引き抜いた伊丹は、まず安全レバーを飛ばした。

「一、二……」

手榴弾の点火時間は安全レバーがはずれ、撃針が雷管を打ってから四〜五秒に設定されている。

爆発によってまき散らされる破片が、このゾンビの群れの隅々にまで届くようにするには、空中で炸裂するようにしたい。そのためにはわずかな間だが、火の付いた爆発物を手に握っていないければならない。

「ざんっ！」

その数秒を耐えて、伊丹は手榴弾を投じた。

ラッシュアワーの電車内のごとく、廊下を埋め尽くす元美女・美少女達の頭上で手榴弾は炸裂、四方に向けて薄肉鋼製の破片をまき散らす。

もちろんその時には既に伊丹もヤオも、回廊の角に身を隠している。

伊丹は、ヤオを抱きかかえるようにして壁の陰にしゃがんだ。

難燃ビニロンを含んだ戦闘服は火炎にも数秒間耐えられる。伊丹は我が身を楯に肌の露出が多いボンテージ鎧姿のヤオをかばったのだ。

「あ、主殿？」

ヤオを抱きしめつつ、伊丹は角から頭を出して手榴弾の効果を確認。

「よし、効果大だな」

すると期待通りに、手榴弾の爆発は三十体以上のゾンビ少女達の手足を引きちぎって群れごと薙ぎ払った。通常ならこんな効果は望めないが、生命力を失った屍だとはやはりどこか肉体の強度が低下するらしい。見た目からは腐敗が進行しているようには見えないが、じわじわと少しずつ彼女達の肉体は崩れつつあったのかも知れない。

* * *

時は、炎龍退治の後、そしてレイがロンデルで学会発表に挑む前のことである。

高機動車一台を駆って資源探査へと向かう伊丹の旅に、ダークエルフ——シュワルツの森部族デュッシ氏族、デハンの娘であるヤオ・ロウ・デュッシは当然のように同行していた。

彼女がその旅に参加した理由、あるいは目的は、三つだ。

一つは、ベルナーゴ神殿に赴くこと。

ベルナーゴ神殿で冥府の神であるハーディに直接「あんたなんて大嫌いだ。もう拜んでやらないぞ。あつかんべー」と棄教を宣言し、同胞たるダークエルフ達が炎龍の餌とされたことに自分がどれほど怒っているかを思い知らせたことなのである。

もちろん何万、何千万といるであろう信者のなかの一人が棄教した程度では、ハーディは痛痒（つらやう）を感じることはないだろう。しかし、たとえそうであったとしても何もしないでおくことはヤオには出来ない。そのためベルナーゴ神殿から招待を受けた伊丹に同行させてもらう必要があったのだ。

二つ目は、贖罪（しゅんざい）のため。

ヤオにとつてはその対象はテュカだ。いかにダークエルフの仲間が炎龍に襲われ、全滅しかかっていたと言っても、それを救うためにテュカの心を追い詰め、破壊される寸前にまでしてしまわないと許されることはない。謝罪し贖罪し、許しを請わなければならぬのだ。

だが、もしそんなことを口にしたらずれば、自分を嫌っているテュカのことだから「顔を見せな

いことが罪滅ぼしよ。とつとどつかに行って」と言い放つたろう。

それを言われたらヤオはアルヌスを立ち去るしなくなる。そうなれば本当の意味で贖罪の機会
は永遠に失われてしまう。だからヤオは、テユカに嫌われてもしばらくは厚顔に振る舞って、その
時を得るまでひたすら彼女の傍らに居ることを選んだのだ。

三つ目は、伊丹の奴隸としての役目を果たすため。

ヤオは炎龍を斃して欲しいと伊丹に懇願する際、『自分を与える』と宣言している。そして伊丹
は炎龍退治に立ち上がってくれたのだから、その時の約束を果たさなければならぬのだ。

奴隸は主の赴くところに常に付き従うか、あるいは主から指定された場所に待機するのが特地社
会の常識である。

しかしながら、そんなことを口にしたらヤオの新たな主神ロウリイ・マーキュリーは、意地悪
そうな薄笑みを見せつつこう語った。

「あらあ、でもヨウジイは貴女は奴隸じゃないって言っているわよお」

実際その通りで、伊丹はヤオを所有していない。書類こそ渡されたが、日本では人間を所有する
という概念が否定されるため、それは文字の書かれたただの羊皮紙ではないのだ。

もし日本に人身売買の制度があったなら、伊丹は解放手続きをすることで、特地社会制度の犠牲
者たるヤオを解き放つただろう。だが「解放する」という行為はそれ以前は奴隸であった、つまり
は一旦は伊丹がヤオを所有していたと認めることに繋がる。当然それを認めることなど出来ないか

ら伊丹としてもそんな手続きをするわけにもいかず、結局はこの状況を放置した。つまりヤオは特
地の法では伊丹所有の奴隸、けれど実質的には奴隸でないという立場に留め置かれてしまったのだ。
「なんと惨い。主殿に捨てられたら、此の身は逃亡奴隸ということになってしまう」

ヤオはそう言うとう自分の足首に嵌まっている奴隸の証たる足枷をロウリイに見せた。

逃亡奴隸が捕獲された場合は、基本的に元の主のところに戻される。しかし元の主がいなか、
あるいは引き取りを拒否するような場合は、拾得者が自分の財産にして良いことになっている。つ
まりヤオは伊丹以外の誰かによって好き勝手に扱われることになる。だから伊丹の奴隸として付い
ていくしかないのである。

ロウリイはしようがないと言わんばかりに首を竦める。

「ならあ別にいいけどおねえ」

そして旅の準備のために高機動車に荷物を積んでいくレイやテユカを振り返った。するとレイ
は無表情に肯き、テユカは仕方なさそうに肩を竦めてヤオの同行を受け容れてくれたのである。

さて、アルヌスを出発した伊丹達である。

まずは北に向かってイタリカへ。そこでフォルマル家との連絡任務をこなすと、そこから進路を
西へ向けた。真つ直ぐ北に向かうのが最短距離なのだが、レイの目的地であるロンデル、伊丹の
最終目的地であるベルナーゴはいずれもロマリア山脈を越えた向こう側。そのため山脈を大きく迂

回する必要があったのだ。

そうやって西へと向かっていくつかの町や城市を通り抜けると、やがてロマリア山脈の麓に規模の町が見えてきた。

その町は、石造りの堅牢な城壁が巡らされた小さな城市……いや市ほどは大きくないから町と呼ぶべきであろう。つまりは城町であった。

外観イメージとしては、フランスにある城塞都市カルカソンヌといったところ。外見に興味のある人はカルカソンヌで「ぐぐって」みて欲しい。現代に残る美しい城塞都市の様子が出てくるはずだ。

小高い丘から遠望した限りでは商店や家屋が城壁内にびっしりと並んでいるため、城町には多くの人間が住んでいると思われる。だが実際に城門を潜ってみると、町の中は荒涼とした殺風景さであった。

家屋のほとんどがその戸や窓を板で塞ぎ、人間の往来もない有り様。

この雰囲気を見て日本では例えるなら寂れた地方都市のシャッター商店街——みたいな状態と言えば分かりやすいかも知れない。

風に吹かれた回転草が、砂風とともに大通りをコロコロと転がっていく様子は、西部劇か何かに出てくるゴーストタウンを想起させた。

「なんか、寂れてるな」

ハンドルを握る伊丹は、そんなことを呟きながら、町の入り口から少し入ったところで高機動車を停止させた。ついでにエンジンも止めてしまう。そしてハンドルを抱えるように身を乗り出して周囲の反応を待った。

しかし十分、二十分と待ち続けていても、町の住民は一人として現れなかったのである。

これが他の町なら伊丹の乗る高機動車の珍しさに、子供達やら物見高い大人達が集まっている頃合いだ。伊丹はそれを利用して町の人とコミュニケーションをとったり、情報を集めたりしているのだが、今回に限ってはもの見事に無反応で空振りしてしまった。

「もしかすると、ここは本当に人間の住まない死に絶えた町なのかも知れないな」

ところがヤオは、後部座席から運転席の伊丹と助手席のテユカとの間に割り込むように身を乗り出して、そんな伊丹の見解を否定した。

「いや、それはない。この感じだと誰かが必ず住んでいる」

「そうなのか？」

伊丹は振り返って真っ直ぐヤオを見た。

すると後部座席のロウリイがヤオと伊丹の間に割り込むように身を乗り出す。

「ヤオの言うとおりよお。人間のいない建物はあつという間に荒れ果てるわあ。こうして見ると薄汚れてはいるけどお、道路に面した家の構えが壊れてはなしでしょう？」

「あ……そうか」

「つまり、この町には誰かが住んでいるというわけよお」

「なるほど。そういうことか。ヤオは凄いな」

伊丹の称賛がヤオには面はゆかった。

学究肌で研究窟に籠もっていることの多いレイや、コアンから外に出ることのなかったテユカと異なり、ヤオには緑の人を探してあちこち町や村を巡り歩き、彷徨った経験がある。その中には炎龍に襲われて滅んでしまった村や町もあって、自然と見る目が養われたのである。それだけに褒められるに値するようなことではないと思っていた。

「誰か住んでるのにこんな有り様というのは……不景気か、それとも戦争が原因かな」

伊丹の言葉にヤオは続けた。

「病気や天災ということもあり得るぞ」

病気なんておぞましいとばかりに伊丹は身体を震わせる。

「とにかく人間が住んでるなら、俺は予定通りこの町の調査を始めるよ。まずは、住んでる人間を探す。町の名前とか、こんなに寂れている理由とかも知りたいからな」

伊丹に課せられている役割は資源の探査だが、この世界そのものの探索でもある。従って地理情報の収集も積極的に行い、町があれば立ち寄って名前を地図に記入し、人口や主な産業を調べ、さらには人種構成や宗教といった情報も掻き集めているのである。

「みんなはどうする？」

伊丹はテユカやレイにも呼びかけた。

「水の補給が必要」

するとヤオを押しつけるようにレイが身を乗り出してきた。

後部に積んであった水用ポリタンクの一つを差し出すレイ。その中身が空っぽなのは、腕の細いレイが軽々とそれを持っていることでも分かる。

水の蓄えはポリタンク四十リットル入り他に三つ。だがレイは常に満タンにしておかないと気が済まない性格のようで、とにかく補給を求めるのだ。

「分かった。水だな」

「可能なら食糧も……」

食糧もまだ充分にあるが、レイは常に満タン……以下略。

「なら、いつそのこと先に飯にするか？」

すると助手席のテユカが、レイとヤオの間に割り込むようにして身を乗り出す。

「そうね。お父さん、このままコウキ（高機動車）で町の中、心部まで乗り付けてみない？ 誰か寄ってくるかも知れないし、食堂だつて通りに面したところに一つくらいはあるはずよ」

結局、四人が全員身を乗り出してた。

そんなことが出来るのも横幅が大型バス並みにある高機動車だからのだが、四人が運転席に身を乗り出したとなるとやはり窮屈で、ヤオはロウイとレイ、テユカにじわじわと圧迫されつい

には追いやられてしまった。

ロウリイやレイの背中を見ながら後部座席に腰を下ろすヤオ。ほんの少し寂しい気分になるが、自分は伊丹の奴隷なのだから出しゃばってはいけないと自分に言い聞かせた。

そんな暗闘が行われていることに気付いていない伊丹は、三人の顔を順繰りに見ながら高機動車のエンジンをかける。

「そうだな。先に飯にしよう」

そしてゆっくりと前進させ、戸口の閉ざされた商店街の奥へと進んだのである。

「おっ、第一町民発見！」

狭い道をゆつくりと進んでいくと、伊丹が声を上げた。

商業組合の看板のある建物の前で住民らしき人影があったのだ。

「どれどれ」

ヤオは、伊丹に言われるままに窓に顔を寄せてみた。

高機動車の後部窓は幌に設けられたビニール製であるため視界がぼやけてしまう。だから窓に顔を押しつけるようにしなければ車外をよく見ることが出来ないのだ。

すると道路端を、身体に布を巻き付けた老人がとぼと歩いてきた。

頭巾に隠された顔を見て、ヤオがその人物を老人だと思ったのは、わずかに見える目とその周り

が日に焼けて皺だらけだったからである。

老人が入ろうとしている行商人組合の隣には、今ヤオ達がめざしている食堂——と言っても、酒場を兼ねているような店だが——がある。そこから少し離れたところには、おそらくは色街らしきものの入り口まで見える。この町は小さいながらも飲食店や風俗系の店舗が多かったようだ。だがしかし今現在の時点で営業をしているのは、この酒場兼食堂の一軒だけらしい。

おそらくこの老人も、その店から出てきたのだろう。

「あの、すみません。この町の名前はなんていうんですか？」

高機動車を減速させた伊丹は窓を少し開けながら、その老人に声をかけた。

老人は訝しげに振り返ると、伊丹の乗った高機動車を見る。そして、後ろの幌窓から見えるヤオの姿を見て突然目を見開き、言った。

「お前達、この町から出て行け！」

「なんです？」

「さっさとこの町から出て行くんじゃ！」

老人は興奮した様子で伊丹を怒鳴りつけた。そして逃げるようにして行商人組合の建物に引っ込んでしまったのである。

ヤオは驚いた。老人が怒り出したのは自分を見てからだ。それだけに怒られたのは自分のせいだと感じてしまったのだ。

「今のは、なんだったのだろう？」

「さ、さあ」

テユカも戸惑いを隠せないようだ。

出合い頭に突然怒られて多少なりとも傷ついたヤオは、訳の分からないこの状況を誰かに説明してもらいたかった。

伊丹が、酒場兼食堂の前でヤオに念を押してくる。

「おいヤオ、本当にここでもいいのか？」

「うむ、ここで良い」

ヤオは大丈夫だと返して心配は無用だと告げた。

それが二ホン人の感覚なのか、伊丹は高機動車を停める場所をいつも気にする。

どうやら二ホンでは停める場所を間違えると官憲に摘発されるらしい。だが、ここにはそんなことを禁じる法はない。しかもこの酒場の前には飼い葉桶やら水桶やら、馬を繋ぐ柵やらもある。つまり乗り物を停める場所として開放されている場所なのだ。そこに高機動車を停めていけない理由はない。とはいえ、伊丹としても道幅の半分を塞いでしまう車体の大きさを考えると、少しは配慮しないわけにもいかないと言う。そのせいでこんなやり取りを毎日のように繰り返すことになってしまうのである。

ヤオが大丈夫だと繰り返ししたことでも伊丹も安堵したのか運転席から降りた。

だが伊丹が外に出た途端、タイミング良く吹き込んできた砂埃を含んだ突風が車内にまで入ってきて、ロウリイやテユカからは小さな悲鳴を上げた。

「きゃっ……」

「閉めて、閉めて！ 砂だらけになっちゃう！」

「いやあ、口に入ったあ！」

伊丹は慌てて運転席に戻ってドアを閉じた。ロウリイは手巾を口に当て、テユカは髪が汚れちゃったと唇を尖らせている。

見ればフロントガラスに細かい埃が積もるように張り付いていた。風に交ざって細かい砂が大量に飛んできているらしい。

見ている間にも、ボンネットにどんどん砂が積もり、そしてまた風に飛ばされていった。

ヤオは、テユカの髪についた砂を払ってやりつつ言った。

「この町が寂れたように見えるのは、このシロツコのせいかも知れないな」

その名称を聞いた伊丹は「パ●テマス・シロツコさま？」などと呟く。

ヤオはもちろん、ロウリイ、テユカもその発言に突っ込みを入れなかった。『ばぶて●す』などと言われても、それが何を意味しているかさっぱり理解できなかつたからだ。

伊丹のボケ発言に、親切に応じることが出来たのはレレイだけである。

「シロッコとは、西方砂漠を横断してやってくる非常に細かい砂を含んだ風のこと。決して、『ぜいた』の女つたらし傲慢男のことではない」

「日本で言えばPM2.5とか、黄砂みたいなもんか。だからこの町じゃあ、誰も外を出歩いてないし、町中の窓も閉め切られているんだな」

「町が寂れているように見えるのは、この町にシロッコに対する備えがなかったからと推測される。このあたりにまでシロッコが届くことは珍しいから」

雪国の家屋が雪に備えた構造を持っているように、こうした砂風が常時吹き荒れているならこの町全体がシロッコに対する備えを有しているはず。それがなかったからこそ、突然の異常気象に対処できず、町はこのような寂れた光景になってしまったのだ。

「しようがない。風が止んだタイミングを見計らって外に出るけど、一応四人とも外套を着ておけよ。モロに被ったら自慢の肌が砂だらけになっちまうぞ」

伊丹の言葉を受けて、ヤオ達は荷物から旅着を取り出して砂に対する防備を固め始めた。

ヤオは鞆から旅着を取り出すとボンテージ鎧の上からそれを纏っていく。それは、初めてアルヌスにやってきた時に着ていたダークエルフの旅装束だ。

それに対してレイは、魔導師のローブの上から厚手の麻製頭巾付のマントを頭からすっぽりと被った。

これは立ち上がると足のくるぶしまで裾が覆うデザインで、頭巾を目深に被ったら種族不明、性

別不詳にまで身体を隠してくれる。これを、ロウリイも黒ゴス神官服の上から、テユカもローライズのジーンズにヘソ出しのピタTという町行きの装いの上から、それぞれ着込んでいった。

レイ、テユカ、ロウリイがお揃いなのはこの旅のために同時にあつらえたからだ。

三人とも髪を砂から守るために頭巾を目深に被ったから、正体不明の集団に見えるだろう。何かの巡礼団とでも思ってもらえれば御の字なのだが、夜の町を迂闊に徘徊すると怪しい集団と思われるてしまうかも知れないので気をつける必要がある。

最後に伊丹だが、この男も砂塵避けに私物の麻製マントを用意していた。

ただしレイ達と違いその裾は腿あたりまでの短い丈になっている。動きやすさを重視し、ゴテゴテとした装備を砂や雨などから守ることのみを目的にしていた。

「拳銃があるから小銃は持っていかなくてもいいか。砂で汚すと分解清掃が大変だし……」

伊丹はそんなことを言いながら右腿の拳銃の入ったホルスターを確かめていた。

「主殿、そんな装備で大丈夫か？」

ヤオは問いかけた。

この世界では武器を携えるということは、攻撃されたら断固として反撃するという意思表示である。そうすることが、鶺鴒の目鷹の目で隙あらばと獲物を探すならず者に対する牽制となる。だからこそ特地上では兵士や騎士でもないのに武装している者がいるのだ。

それだけにヤオはもつと大きな、いかにも武器に見える装備を身に着けるべきだと提案した。

だが伊丹は頭を振った。

「大丈夫だ。問題ない」

使えない獲物を持ってもしようがない。いざとなったらこれで充分と拳銃を指差している。

確かに伊丹の言う通りなのだが、問題は伊丹の携行する拳銃を武器だと認識する者がいないことだ。伊丹が身に着けているもので武器だと周囲から思われるのは、腰の銃剣くらいだ。

「虚仮威し^{こけおど}というのも馬鹿にならないぞ。そうだ、鉄の逸物を持ち歩いたらどうだ？」

ヤオは後部座席に置いてある110mm個人携帯対戦車弾——通称LAMを持ち上げた。これなら周囲に対して得体の知れない威圧感を放つこと請け合いだ。

「やめてくれよ、十三キロもあるんだぞ。んなもん重くていちいち持って歩けないから。……よし、風が止んだ。みんな出るぞ。いつせーので、下車！」

服装を整えた伊丹達は、号令で一斉に高機動車から降りた。だがドアを閉じた途端、不意を突くように砂を含んだ風が勢いを増した。

「うわっ、また来た」

「早く店に！」

横殴りに叩きつけるように砂が吹きつけ、わずかに露出している手首やら顔に激しくあたって痛い。そのため、五人とも逃げるようにして食堂に駆け込んだのだった。

食堂の入り口は毛布がカーテンのように三重に下げられ、風と一緒に砂が侵入することを防いでいた。おかげで店内には光も入らず、まだ昼だというのにかがわしい店でもあるかのように薄暗くなっていた。

最初に夜目の利くヤオが、立て付けの悪い木製の床を踏みならしながら入る。

意外にも店内は広かった。百人ぐらいの客でも収容できそうなほどの数のテーブルと椅子が並べられている。

といっても今は客が少ない。店の規模に比べたらガラガラと言っても良い状況だ。

照明は、壁の各所に掛けられた数十本の松明。しかし店全体を照らすには十分でないため、店内の出入り口と、奥まったところにあるカウンター周辺をはじめ、限られた範囲を重点的に照らすように配置されていた。

カウンターでは店の主人らしき男が皿を洗っている。

店の主人は、入ってきた客をジロリと睨みながら叫んだ。

「入るならそこで、砂を払ってからにしてくれ！」

ヤオに続いてロウリイ、テユカ、レイ、少し遅れて伊丹が店内に入ってくる。伊丹が遅れたのは風に煽られたレイが転びそうになったからで、それを助けていたのだ。

「すっごい風だったなあ」

店の主人の言葉に従い、入り口で互いの外套についた砂を払い合った。

暗い店内には、ならず者めいた容貌の男達が六名。

全員ヒト種で、その内の四人はカウンター近くのテーブル席でカードゲーム中。二人はカウンター席で店主に向かって何やら話しかけている。

あと数人ほど暗がりには心配があるが、人数までは確認できない。

皆から向けられた値踏みするような視線から感じられるのは、負の感情。つい今しがた、老人から出て行けという言葉葉を浴びせられたばかりでもあるため、ヤオはなんだか立ち入り禁止場所に踏み入ったことを咎められているような居心地の悪さを味わった。

「四人とも気をつける。我々は歓迎されてないらしい」

ヤオは、伊丹達に注意を喚起するよう囁いた。
するとテユカが肯く。

「分かったわ。様子が掴めるまでは、頭巾は被ったままにしておいたほうが良いわね」

レイがそれに続いて無言、無表情で肯いた。

「けど、変よねえ」

ロウリイだけが首を傾げて訝しがっていた。伊丹はその理由を尋ねる。

「どうしてだ？」

「この町は北に向かう街道筋にあるのよお。普通そんな町はあ行商人の中継地点になるはずよお。外来者で成り立っている町があ、外来者を嫌うはずがないのよお」

「なるほど。そう言えばそうだよな」

ロウリイの解説に伊丹も肯く。町としてはそれほど大きいわけでもないのに、しつかりした色街があるのはそれが外来者向けだからなのだ。

ヤオは状況を総括した。

「にもかかわらずこの町は余所者を歓迎してない。寂れているのは砂風のせいばかりじゃなく、この雰囲気客が寄りつかなくなったからか？」

「余所者を歓迎しない理由が疑問」とレイ。

「何か事情があると考えた方がいいわね」とテユカ。

四人のまともに肯いた伊丹は、レイの抱える水用ポリタンクを取り上げながら言った。

「分かった。そのあたりの事情を店の人間に聞いてくるよ。みんなはその間に席を確保して座って待っててくれ」

ヤオが片目を閉じながら答えた。

「出口の近くにだな？」

出口の近くを選ぶ理由は、万が一の時に素速く逃げ出せるようにしておくためだ。

男一人に女四人という集団はやつかみもあってか酔漢の注目を浴びやすい。おかげでこれまでに食事中に絡まれたことは一度や二度では済まなかったのだ。

「ロウリイが胸にでも看板をぶら下げてれば、絡んでくる酔っ払いもないでしょうに」

テユカが嫌みつたらしくうそぶく。

するとロウリイはハルバートの石突きで床を軽く叩いた。

「これがあるでしょ。それでも分からない輩はあ、看板をぶら下げたって分からないわよお」

黒ゴス神官服と巨大なハルバートは、漆黒の亜神、ロウリイ・マーキュリーの言わばトレードマーク。この巨大な神鉄の塊を軽々と持ち運んでいる段階で、ただ者じゃないと一目置いてくれれば物事は簡単なのだ。

しかし酔っ払った腕自慢は、それを見てロウリイの正体を想像するよりも先に、『喧嘩上等』の挑戦状だと思ってしまうものらしい。

ロウリイも、テユカもレイも、そしてヤオ自身もだが、丁寧な物腰の相手には丁寧に、乱暴な相手には乱暴に対処する気性だから、酔漢が複数名いたりすると、下手をすれば店全体を巻き込んだ乱闘へと発展する。そしてその結果、酔っぱらい達ばかりでなく、店にとってもご愁傷様としか言いようのない事態になってしまうのだ。

その都度後始末に奔走させられる伊丹が言う。

「みんな口に出さなくても分かるようになってくれて嬉しいよ。けど、どうせ配慮をしてくれるなら争い事を起こさない方向へと進めてもらえないかな？」

するとレイが、言うべき相手が間違っているかと反論する。

「その言葉はヤオに。すべてはヤオが原因なのだから」

確かにその通りで、皆が大喧嘩を始めるのは、酔客が「おお、ダークエルフのねーちゃん、色っぽいねえ。俺と一緒に飲まない？」などと言ってヤオに誘いを掛けるのがきっかけだ。

ヤオは誘蛾灯のようにその手の男を引き寄せてしまうのだ。

その後、売り言葉に買い言葉のお決まりのやり取りが儀式的に執り行われ、秒読み点火。大乱闘が勃発する。

しかしヤオにも言い分はあった。自分は悪くない、だ。狙われるほうが悪いかのような指摘は、性犯罪の被害者に「そんな場所に行くのが悪い」「そんな格好をして歩いているのが悪い」と批難するのと同じなのだ。

「争いを起こしたくなければ袋でも被っている……と？」

「麻袋を買ってあげましょうか？ 顔に被るのに良さそうなのを」

しかし女性に対して厳しいのはやはり女性で、テユカが押搦するように応じた。

さらにロウリイがまぜっ返す。

「顔だけ隠したってだめよお。男連中はヤオの身体を見て声をかけてくるのだものお」

「だったら胸のあたりまで袋で包めば良いわね」

テユカが、ヤオの身体……特に胸のあたりを睨みながら言った。

今は旅着によって見えないが、その下には四人の中で最も自己主張の強い身体が隠されている。旅着の隙間から、チラチラとボンテージ鎧が覗くのもかえって扇情的だったりする。

テユカの視線に羨望の色を感じたのか、ヤオは誇らしげに胸を張った。

「それでは下半身が無防備になってしまう。男達の中には此の身の下半身にじろじろ視線を這わせる輩も少なくないんだが」

「くっ……なら、麻袋に全身すっぽり入れなさい！ いっそのこと袋の口を縫って外に出られなくしたらいいわ」

「そうすれば平和」とレイも参戦した。

だがヤオも負けてはいない。

「袋に詰め込まれたら外を出歩けなくなってしまう。それでは此の身は食事を取るところか、飲み食いすらできなくなる」

「飲まなきゃいいのよ！」

「飲まず食わずなんてことになったら乾涸ひかびてしまうではないか。そうになったら主殿のあらゆる欲望に応じるという役目を果たせなくなってしまう。どうしたら良い？」

三対一の逆境に形勢不利を悟ったヤオは、伊丹の腕を抱きしめて胸の膨らみを押しながら助勢を求めた。

だが、伊丹の答えは素っ気ない。

「頼むから俺を巻き込まないでくれ」

ヤオとしてはもうちょっとドギマギして照れるとか、唾をグビリと呑み込むとか、自分の腕に触

れるヤオの胸を見てしまうといった感じの、男が女性に見せる一般的な反応を見たかったのだ。

なのに伊丹はヤオの魅力にちっとも靡なかないというか、全く気付かない態度で、店の主人がいるカウンターへと向かって行ってしまった。

「ふむ、反応なし。ダメだったか」

伊丹の背中を見送りながらヤオは肩を竦める。

それを見たテユカは、我が意を得たりとばかりに言い放った。

「お父さんはあんたみたいなのに興味はないんだから。誘惑しても無駄よ」

「彼は同性嗜好なのか？」

「失礼ね！ あんた、自分に興味がない男はみんなそんな風だと思っわけ？」

「もちろんそんなことはない。人間には好みというものがあるからな。とはいえ、ここには此の身だけでなく御身も、レイも、そして聖下もいる。これだけ佳い女が揃っていたら、誰か一人ぐらいは主殿の好みに適っていてもおかしくない。なにに主殿は誰にも手を出そうとしていない。なら、同性嗜好なのではと思っても致し方ないだろう？」

「そ、それは……そうだけど」

テユカが不満そうに頬を膨らませる。するとロウリイが手を振って言った。

「なあいなあ。日ごろ読みふけている絵草紙を見ても、それはないことは分かるわあ」

「絵草紙？ それは誰かの肖像画ということか？」

『門』の向こうにある彼の故郷ニホンに、恋い焦がれている異性が居るといふのなら彼の他の女性陣に対する態度も納得がいく話である。

するとレイは指摘した。

「ちょっと違う」

「なら、主殿はどんな女が好きなのだ？」

「そりゃねえ……」

ロウリイ、テユカ、レイは互いの顔を見合った。そして深々とため息をつく。

それが分かったら苦労はないという顔だ。

「その絵草紙というのはどんなだ？ テユカは見たことがあるのか？」

「あとで見せてもらえば良いわ。何処に行くにも大抵一冊は持ち歩いているから」

ヤオ達はそんな風に伊丹について語り合いながら、カウンターから一番遠いテーブル席に腰を下ろしたのである。

02

店にいる男達は、カウンターに近づく伊丹の風体をじろじろと見ていた。

迷彩戦闘服は、この世界では奇天烈なデザインに見えるらしく、人々から奇異な——日本人的な感覚で言えばちんどん屋さんを見るような視線を向けられることが多い。だが、今は砂避けのマントで身を包んでいることもあり、伊丹への視線はそういう類いのものではなかった。

明らかに「お前、何者だ？」的な警戒の色を含んでいる。

「お客さん、見かけない顔だね。シロツコの吹き荒れる中、どこから来た？」

店の主人が、カウンターの前に立った伊丹に声をかけてきた。

「東。クワンドナンのほうだよ」

伊丹はあえて解答をぼやかして途中立ち寄った町の名を告げた。

嘘はついてないが正しくもないという言い方だ。戦時に敵地を偵察して歩き回る以上、素性は出来る限り言わないほうが良いという判断だった。

「クワンドナンから来たんなら、ソンドロウの村あたりで迂回しろとか言われなかったか？」

「いや。言われなかったけど？」

伊丹は内心舌打ちした。嘘の底が浅くて怪しまれてしまったかも知れない。しかし、店の主人はそこまで深く追及してこなかった。

「で、どこに行く？」

「ベルナーゴ」

「ベルナーゴ……巡礼かい？」

店の主人は、ロウリイ達の出で立ちからそう解釈したようだ。そして伊丹はそれを積極的に訂正しない。あまり説明すると、さらに嘘を重ねて泥沼にはまってしまふからだ。

「そんなようなものだよ」

「なら、このクレティがどうなっているか知らなくてもしようがないな。悪いことは言わない。出来るだけ早くこの町から出るこつた」

「どうやらこの町はクレティという名がついているらしい。」

「早くこの町を出たほうが良いというのは、やっぱりシロツコのせいかな？」

「まあ、なんだ、その……そんなもんだ」

店の主人が何かを隠したと伊丹は感じた。

すると店の主人は饒舌になって、シロツコがこの町にどれほどの被害を与えたかを語り出した。

「これでもマシになったほうなんだぞ。ついこの間なんて、砂を頭から振りかけられたような気分になった。三軒先の家なんて、砂が屋根に溜まって重みに耐えられなくなつてな。屋根が抜けちまつた。だからこんな町に長居しないほうがいいんだ……」

「分かったよ、用が済んだら出て行くさ」

店の主人の表情はまだ何か言いたそうである。しかし伊丹が出て行くと答えたせいか、それ以上のことは口にしなかった。

「それで出ていく前に聞きたいんだけど、この町の産業って何？」

「産業って……あんたそんなこと聞いてどうする？」

「俺の親戚が行商人だね。知らない町に行ったら名産品とかそういうのを尋ねておいて、後で教えてやるんだ。何かこの町で仕入れられたら儲けられるかも知れないだろう？ 人口とかも知りたいなあ……」

「あいにくだけどこの町は今不景気だね。余所に売れそうなものはない」

「不景気ってだけで、こんな風にはならないと思うんだけど？」

日本の各地で商店街がシャッター通り化するのには、大規模小売店舗の進出や、不景気が原因だと言われている。だがその実、店主の高齢化、そしてその子が店を継がないといった事情が裏に含まれていることも多い。さらに店舗のオーナーが老後の収入として家賃収益を見込んで不動産を手放さずにいるのも要因の一つだ。

店舗を借りて営業しようとする者にとって、人件費、光熱費の他に、家賃分まで稼がなければならぬとなると営業を安定軌道に乗せるためのハードルはとて高い。そのせいで事業が頓挫、撤退する例も多く、結局は空き店舗となつて商店街自体が衰退する。

商店街が死に絶えていくのは、そうした様々な原因が積み重なつてのこと。全てを一概に不景気のせいには出来ないのである。

この町が寂れているのも、不景気以外の原因があるに違いないと伊丹は睨んでいた。

店の主人は、銅製のカップを磨きながら語る。

「この町の名産品ねえ。この町で作られていて余所からきた商人が買いそうなものなんてブルの作った月琴ぐらいかね？」

「月琴？」

「ああ、あれだ」

店の主人が指差した壁を見ると、円形の胴をもった十六本弦のリユート属楽器が立て掛けられていた。繊細な細工が施された美しい外見である。

「ああ、あれのこと？」

「そうだ。なかなか良い代物らしくて、吟遊詩人や名の知れた演奏家もわざわざこの町に買いにやってくるんだ」

「なんだ、ちゃんと名産品があるんじゃないか」

「けど職人一人じゃ町全体を養うほどの儲けなんか出るはずないだろ？ 需要だってそんなにあるわけじゃない。だからこの町の主力産業と言えば宿場ってわけさ。けど最近はそれもダメになっちゃった。戦争でご領主がおつ死んじまったり、良いお客だった兵隊達も出て行っただけ戻って来なかったり、砂嵐が吹き荒れて行商人の足が途絶えたり、色街の女達も……」

「女達が……なに？」

「いや、あんたら巡礼者には関係のないことだ。とにかくこの町は長居しても良いことはないんだ。だから早く出て行け。いいな？ さあ、そんなことより注文してくれ。席に座っておいて立ち話だ

けなんてのはゴメンだぞ」

頭ごなしに言われた伊丹は、ちゃんと注文するつもりがあることを示すため、カウンター上に水のポリタンクを置いた。

「これに水を口切りいっぱい入れて頂戴よ。それと食事を五人分、適当に見繕ってテーブルに運んで欲しい」

「今、手が足りないんでね。あんな遠い席に運ぶとすると、運び賃込みで銀貨三枚になるんだがいいか？」

伊丹は周囲を見渡して、こうした店につきものの女給がないことに気付いた。どうやら店主はたった一人でこの広い店を切り盛りしているらしい。

「セルフサー……あ、いや。自分で運んだとしたら？」

「なら二枚に負けといてやる」

「銀貨が二枚ね」

伊丹は言われるままに胸ポケットから財布を取り出す。

それは日本で使っていた札入れではなく、この特地で一般的に使われている革袋だ。伊丹はその紐を解き、適当に突っ込んである金銀の貨幣の中から、じゃらじゃらとソルダ銀貨を二枚選び出す。そんな伊丹の所作は店内の男達から注目を浴びた。

「はい。ソルダ銀貨二枚」

「ソルダ銀貨じゃ売れないね。その財布にたんまり入ってるデナリ銀貨でよこせ」

デナリ銀貨とソルダ銀貨は、同じ銀貨でもサイズや厚みが違ってその価値は四倍違う。日本円に換算するのは難しいが、一ソルダでいたい二千円くらいと思えば良い。

「デナリを二枚って……高くないか？」

「嫌なら余所に行けばいい」

別にこっちから客になってくれと頼んでいるわけじゃないと店の主人は嘯いた。

「しようがないな」

クレティが不景気となった背景には、こんなボツタクリ行為があつたのかも知れない。

伊丹は肩を竦めるとデナリ銀貨を取り出してカウンターの上に置いた。そして、ロウリイ達の待つテーブルへと戻っていったのである。

そんな彼の一举一動は、店内の客達によって見つめられていた。

伊丹が席に戻って、今宵の宿をどうするかと四人で話していると店主が声をかけてきた。

「ほれ出来上がったぞ、お客人。ここまで取りにきな！」

伊丹は席を立った。

ヤオとテユカもすくと立ち上がり、レイとロウリイも少し遅れて腰を上げようとする。だが伊丹は「いや、俺が一人で行ってくる。みんなはそのまま座っていてくれ」と告げた。

「気が利くのねえ。独占欲う？」

ロウリイの投げた言葉に、伊丹は「違うさ」と苦笑いを返す。

店の男達にロウリイ達を近づけたくないのは、トラブルを起こしたくなかったからだ。

もちろんその配慮の方向は見知らぬ男達の安全へと向けられている。花の麗しさに思わず手を伸ばしたら、それがトゲ一杯の鬼アザミだったというのは本人の責任だ。だが痛い思いをするだけに終わらず、再起不能にされかねないとなれば、同情の一つもするようになるのは仕方ないことだ。

伊丹はカウンターとの間を二往復して料理をロウリイ達四人が待つテーブルへと運んだ。

「はい、お待たせ」

「良い匂いねえ」

料理は芋と野菜と肉の入ったスープ。乳漿にゅうじょうと黒パンの塊だ。

スープの具は羊肉の内臓を煮込んだもの。まさかこんな寂れた町でありつけるとは思えないほどに上等な料理だ。今は寂れてしまっても、かつて行商人で賑わっていた店だけのことはあると伊丹は素直に感心した。

「これってチコリの香りい？」

「たぶん、そう」

香りを楽しむためにスープに顔を近づけているロウリイとレイ、テユカ、ヤオ。

伊丹は最後に自分の分の食事と、ポリタンクを受け取るためにカウンターへと向かった。

するとその時、店内の男達がざわめき始める。何かと思えば、みんなロウリイ達に注目していた。

「おい、見ろよ。女だぜ」

「若い女を四人も！ ちっ、あの馬鹿野郎め！」

四人とも、食事をするのにかぶり物が邪魔なので、みんなで一斉にフードを上げて顔をさらす形になった。おかげで四人が女性だということが知られてしまったのだ。

伊丹は、浴びせられる視線に針のようなチクチクとした嫌な感触を得た。

それは皆も同じだったらしく、ロウリイもテュカもヤオも苦い物を口に含んだような顔つきをしている。

無表情なのはレイだけだったが、そのレイですら動作が固まっていたのだから、相当の強い敵意を感じたのだろう。

「こりゃ、早いところ退散したほうが良さそうだ」

伊丹は自分の食事の載ったトレイを左手に、そして水でいっぱいとなったポリタンクを右手に提げるとロウリイ達の待つテーブルへと向かった。

だが、いかにもならず者という風体をした巨漢が伊丹の目の前に立ちはだかった。

「おいお前……気に入らねえな」

「はい？」

「気に入らないって言うてるんだ！」

ヒト種のその男は伊丹よりも頭二個分背が高かった。

上腕二頭筋や上腕三頭筋がつくる腕回りは、女性の腰回りほどの太さがある。胸板もぶ厚くて腹部に隆起する筋肉は巨大山脈のようだ。

「おっと、失礼」

伊丹は、立ち止まることなくぺこりと頭を下げると巨漢の右脇を迂回した。すると巨漢は手を伸ばして伊丹の襟首を掴む。いや、掴もうとする。

だが巨漢の手は伊丹の襟元で空を切った。

両手の塞がっている伊丹は、素速く体を返すと足捌きだけでとって返して方向転換、巨漢の左脇をすり抜けたのだ。それはまるでサッカーのミッドフィールダーみたいなトリッキーな動作であった。巨漢の目には伊丹の姿が消えてしまったように見えただろう。

「おっ……どこだ、どこにいった？」

その時には、既に伊丹は巨漢の背後にいた。

店内の男達はそれを見て一斉に笑った。巨漢が伊丹に手玉に取られたように見えたのだ。

「ブル！ 後ろだよ、後ろ」

「なんだと？」

振り返ると、伊丹はすたすたと先へ進んでいた。

巨漢は慌てて伊丹に追い縋り、再びその前に立ち塞がった。

「逃げ足だけは立派みたいだな」

巨漢は、伊丹の逃げっぷりを嗤った。

屈辱感を、伊丹を小馬鹿にすることで誤魔化そうとしているのだ。あるいは挑発して向かってこさせようとしているのかも知れない。

だが伊丹はしれつと言い返した。

「逃げ足だけは鍛えてるんだ」

伊丹としては喧嘩は買わないと暗に告げたつもりなのだ。だが、巨漢はそのようには受け取らなかった。侮辱を受けたと感じたらしい。

「そうかい？　なら都合が良い。その逃げ足とやらで、お前ここらとつとと失せろ！」

どうやら巨漢はあくまでも伊丹に絡むつもりらしかった。腹を空かせた肉食獣が草食動物を捕らえるように、本腰を入れて伊丹に挑みかかろうとしている。

伊丹は、巨漢の左右に隙を探しながら言い返す。

「言われなくても。これを食べたらね」

「ダメだ、今すぐだ」

巨漢は伊丹の真正面まで迫ると、鋭く威圧しながら繰り返した。

「争い事は嫌いだろ？」

「食事くらいしても良いでしょ？」

「ダメだ」

巨漢が目を据わらせる。そして右手が腰に下がっている短剣へと伸びていく。力尽くで言うことを聞かせるぞという威嚇のようである。

店内の緊張感が高まっていく。

どうやら激突は避けられないようだ。襲われるのを防ぐには、拳銃で天井を撃つとか、床を撃つといった示威的行動が必要になるかも知れない。

伊丹もまた右手のポリタンクを床に置き、腿の拳銃にゆっくりと手を伸ばした。

するとテーブルで食事していたロウリイが、伊丹を援護するためかハルバートを引き寄せた。

レイイが杖を、テユカとヤオも、それぞれが愛用する弓矢に手を掛けて、いつでも戦えるよう身構えていく。

それを見た伊丹は、慌てて剣の柄に手を乗せた巨漢に「抜くなよ」と警告した。

「やめておいたほうが良い。これは、あんたの身のために言っている」

四人は伊丹のように優しくない。

巨漢が剣を抜いたら、伊丹がどうこうする前に、まずロウリイがハルバートで襲い掛かる。

その際、ロウリイが巨漢の剣を弾き飛ばすだけにとどめてくれるなら良いのだが、場合によって

は問答無用で身体を両断してしまう恐れもある。

だが巨漢は言い続けた。

「俺だってお前達……特に、後ろに居る女達のために言ってる。早くここから出て行け。この町から逃げるんだ！」

「？」

伊丹は、困惑した。

逃げるんだ。

そんな言葉は、間違っても肉食獣が獲物に対して投げかける言葉ではない。

この店にいる男達は、いかにも無頼漢っぽいから、女達を寄せせとでも言ってくるかと思いきや、そうではなかった。外来の女達の身を心配しているらしいのだ。

伊丹は巨漢の背後にいるロウリイ達のほうを見る。

すると四人とも毒気を抜かれたような不思議そうな表情をしていた。自分達を見ず知らずの男に心配される意味が理解できないのだ。

伊丹は巨漢に真意を尋ねた。

「彼女達は迷惑そうだけど？」

「そりゃ、この町で起きていることを知らないからだ！ この糞馬鹿野郎のどんとんちきめ！」

その必死そうな態度から伝わってくるのは、何か大変な問題がこの町で起こっているらしいとい

うことである。

「もう少し分かりやすく説明してくれ」

巨漢は、真剣な面持ちで言った。

「だから！ この町は今、若い女を連れて来ちゃいけないんだよ！」

「誰もそんなこと言わなかったじゃないか？」

「それは最初はそこにいる四人が若い女だとは思わなかったからだ。ハーディのところへの巡礼っ
て言えば老い先短い爺さん婆さんが相場だからな。それだったら問題はない」

「若い女だとダメなのか？」

「そうだ」

この巨漢では話が分からない。伊丹は説明を求めて店の主人を振り返った。

「この町でいったい何が起きてると言うんですか？」

すると店の主人がカウンターを出て、伊丹達のところまでやってきた。

「この町では、今若い娘だけがかかる厄介な病気が流行ってる」

「病気？」

「原因不明の熱病だ」

すると店にいた男達もうんうんと肯く。そしてロウリイ達に駆け寄ると、真摯に心配しているよ
うなことを言った。

「あんたら身体の具合は大丈夫か？」

「熱っぽかったりしないか？」

どうやらこの町の男達は、見てくれは乱暴で無頼な雰囲気だが、中身は実に紳士だったようである。

伊丹はようやく合点がいった。

「つまりこの町では、原因不明の熱病が流行っている。発病するのは若い女性に限られており、こうしている今現在も、あちこちの家で多くの女性達が苦しんでいると？」

「そういうことだ」

店の主人は諦念の色を漂わせた表情で肯く。通常危機的状況が起きたら人間は騒ぎ立て、なんとかしないと対策を講じる。だがその表情からはそんな全てをやり尽くしてもなお、どうすることも出来なかった男の無念と悲しみが感じられた。

伊丹の前に立ちはだかっていた巨漢も手近な椅子を引っ張ると、どっかりと腰掛け顔を伏せた。

「これは寝ていれば良くなるような類いの病気じゃないんだ！ 既に何人もの女がこの病気のせいで死んでしまってるんだよ！ そのせいでクレアがクレアの奴が」

その嘆きぶりから察するに、身近な誰かが亡くなったのだと思われた。

「クレアって誰？」

店の主人に囁くとそつと教えてくれた。

「ブルの女房だ。なかなかの美人で月琴の名演奏者だった」

伊丹は、町の唯一の特産品と言われた月琴の製作者が、ブルという名前だったことを思い返した。するとその時、テユカが柳眉を逆立て起ち上がって抗議の声を上げる。

「でも、そんな悪疫やっばいが流行ってるなら、どうしてこの町は城門を閉じて立ち入りを封じないの？ 城門さえ閉じてあれば町に入っいてこなかったのに！」

「別に城町の中だけで病気が流行っているわけじゃないからさ」

店主の言葉にテユカとヤオは互いに顔を見合わせた。

「まさかこの付近一帯全部に？」

「そうだ。医者が言うには、砂含みの乾いた風のせいだとか……」

テユカは狼狽うろたえながら言った。

「ちよつと待ってよ。あたし達、砂をもろに浴びちゃったわよ！」

「いや、大丈夫だ。必ずしも病気になるわけじゃないからな。発病するのは二人に一人くらいだから運が良ければ……」

伊丹は天を仰いで顔を押しさえた。

「感染率五〇パーセントかよ!? ちつとも大丈夫じゃないじゃないか！」

店主はテユカを安堵させるつもりで口にしたのかも知れない。だが、知れば知るほど全く安心で

立ち読みサンプル
はここまで

きなくなる。何しろ二人の内一人が発病するということは、ロウリイ、テユカ、レレイ、ヤオの四人のうち二人が発症することを意味しているのだ。

ブルは拳でテーブルを叩いた。

「だから早くこの町を出て行けと言ったんだ！ この町の金持ち連中は、砂風を防ぐような特別な馬車を仕立てて余所の町に女房や娘を逃がしたりしているくらいなんだぞ！ なのにあんたと来たら逆に女をこの町に連れてきちゃった。だから、俺達はこうして怒ってるんだ！」

すると興奮する巨漢を店の主人は宥めにかかった。

「ブル……そう言うな。お客人は知らなかったんだから、しょうがないだろ？」

「くそっ……」

「分かった。とにかくテユカ、ヤオ、ロウリイ、レレイ。町を出るぞ」

伊丹は皆に退却を宣言した。

「そ、そうね」

座っていたロウリイとヤオも立ち上がる。

だがその時、テーブルで、がちゃんと木の椀や壺が倒れる音がした。

伊丹は、思わず振り返る。

見れば、テーブルにレレイが突っ伏していた。

「どうしたレレイ？ レレイ!？」

伊丹は慌てて駆け寄り、レレイを助け起こす。

だがレレイの顔は真っ赤になっていた。身体が火のように熱くなっていることが衣類を通しても分かった。

「ま、まさかレレイが……」

「どうやら手遅れだったみたいだな」

町の男達は苦々しい表情で言った。

「言わんこっちゃない」

レレイが、この土地の奇病に感染してしまったようであった。

* * *

「第一〇一特地資源探査隊、総員五名事故一名、現在員四名。事故の内訳は熱発就寝……か」
伊丹はそんなことを呟きながら、レレイを寝台に横たわらせた。

運が良いことにこの町の酒場兼食堂の二階が宿屋だったのだ。もちろん酒場で営業しているような宿がまともな用途で利用されていたはずがない。娼婦と男達が声をかけ合い誘い合い、商談がまとまると一夜を共にするために用いられるような部屋である。

だが、今現在はこの町には若い女がいない。いや、いることはいるが町に残っている女のほとんど